

意識の成立と構造

——生物体の機能としての観点から

佐 藤 義 之

【はじめに】

意識はいまだ解かれざる謎に包まれている。デカルト以降、近年のゾンビ論証に至るまで、意識について考える哲学者のうちかなりの者は、論理的に可能な意識のあり方を考える理念的な思考を展開し、そこから意識の本質を描き出そうとしてきた。しかしその試みは意識の像を歪めてしまった。むしろ現実の意識のあり方をふまえ、生物において意識は何のために生じてきたかを考えることで、ゾンビ論証に代表される奔放な思弁が陥った罟を回避し、われわれの現実の意識の核心をつかむべきではないか。意識の解明において、意識が進化のなかで生物体の一機能として、生きるための役割を果たすべく誕生したものだという点をふまえることは大きな手がかりになると考える。

とりわけ私は現象学を奉ずるものとして、あたえられたこ

の事実的な意識を忘れるわけにはいかない。どういう「意識」を考えるにせよ、私が事実に有しているこの意識から完全に自由に、意識の「本質」的なあり方を想定することをめざすなら、意識の姿を歪めこそすれ、意識を理解する上で大きな進歩は望めない。私は本論文では、事実的なこの意識のあり方を重視して意識についての考察を進めたい。その過程で、現象学者にとっては馴染みの立場である、意識とは世界を生き行動する実存としての主体の一面だととらえる立場の妥当性が示される。われわれはそういう立場からのアプローチをめざしたい。

【一】意識は不要か——リベットの議論

神経生理学者B・リベットは、『マインド・タイム』(1)において、彼自身の実証的研究にもとづき、意識の自由に関する衝撃的な見解を示した。

身体から脳への入力には脳で適切に処理され、行動等の形で出力として現れる。その処理には意識がともなっている場合もない場合もある。リベットは、入力は脳に〇・五秒程度の活性化の持続をを引き起こさない限りその刺激が意識化されるには至らないことを示した。しかし一方で、〇・五秒の活性化をまつことなく、意識化されないまま脳での情報処理は生じている。その状態で適切な出力が返されることさえあるという。

リベットの説明例を借りることにしよう。車を運転している際に少年が飛び出してくるのを見て急ブレーキをかけたとき、少年が飛び出してきたと意識されるのは〇・五秒後である。しかしブレーキを踏む反応はその意識が生まれる以前の、目撃の〇・一五秒後からすでに始まっているという。このような、単なる脊髄反射ではない複雑な精神機能による行動が、無意識のうちになされている。だが、われわれはそれが無意識のうちに生じていることだとは気づかない。それは意識に現れる主観的時間感覚においては、意識がつねに自らの遅れをとり戻すような調整を加えているからである (MT90-91/105-6) (3) (4)。

つまり、リベットによれば、私は少年の意識化を待たずブレーキを踏んでいるのであり、意識はブレーキを踏むその行為にかかわっていないのだが、主観的時間の調整があつてその遅れが覆い隠されるため、私が少年に気づき、その意識にもとづきブレーキを踏んだかのように、感じることができるのである。

このように考えるなら、意識は行為を決定しているのではないことになる。無意識のうちに行為は決定されてしまっていて、意識は無意識の行うブレーキを踏む決断を傍観しているだけにも見える。

ただ、リベット自身は、「拒否権」という限定的な形ではあるが、ひとの自由意志介入の余地を認める (MT137-138/161)。彼は原因となった刺激（飛び出す少年の姿）をうけて無意識のうちに〇・一五秒後に始まった身体活動（ブレーキを踏もうとする足への指令）が、原因となった刺激が意識にのぼってくる目撃の〇・五秒あとも、なお停止できる時間的余裕があることに注意をうながす。その姿が少年でなく静止した看板だということに私がすぐ、意識において気づいた場合は、ブレーキを踏めという脚への指令を、踏む行動の前に中止できる時間的余裕があるというのである。つまり行動開始の自由はもたないが、一種の「拒否権」を行使する自由はもつというのである。

しかしこの「拒否権」説に対しては反論も当然ある。リベット自身がその反論の可能性に気づいていることではあるが (MT147/173) 次のような反論が有力である。

彼の自覚についての議論を延長するなら、意識的に拒否権を行使することも、それに先行する意識以前の過程の働きが意識にのぼってきただけということになりかねない。その場合、「拒否権」を認めても自由意志は守れないのではないかという疑念が生じる。だとすれば彼の意図に反し、彼の説は決定論につながることになる。

これに対し私は、拒否権の問題だけでなく、意識が決定に関与していないというリベットの議論に疑問を感じている。というのももし意識がせいぜい傍観者だとするなら、生物の進化は何のためにこのような傍観者を作り出したのだろうか。淘汰はあくまで表に現れる行動にかかわる。行動が生存に適していれば進化上メリットになるが、もし行動が意識により自覚される以前にすべて決まってしまうているなら、意識があつても何のメリットもない。何のメリットもないばかりか、意識が実現されるためには神経のさまざまな仕組みが必要であることは間違いないだろうから、意識実現のための無駄な機構を維持するという生存上のデメリットもある。とてもそういうメリットなき意識を自然が生み出したとは考えにくい。ではリベットの主張する「拒否権」については、進化上可能と言えるだろうか。たしかに上述のように「拒否権」については進化上の問題とは別の点で疑問があるが、そこを一步譲って「拒否権」の主張を認めればどうか。リベットの「拒否権」においては、限定されているとはいえ、自由な選択の働く余地があり、それによって無意識の反応以上に生存価値を高め進化のお眼鏡にかなう可能性はあつたのではなからうか。しかしそれを検討するよりもまず、リベットの実験が果たして自由意志の問題をとらえる適切な枠組みを示しているかを問うてみるべきであらう。

リベットがみずからの実験で試している意志決定とは、すでにすべきことが決まっている動作（手首をまげる）の開始のタイミングを自ら決めて実行するということにとどまる

(MT125:127/146-147)。しかしながらこれを私たちの日常の実践において「自由意志」にかかわる場面全体と比べてみると、ごく貧弱な選択にすぎないと言える。通常の自由意志の行使において、私はいつ行かうかというタイミングだけでなく、何を行うか、そもそも行かうかどうかを決める。いまこの瞬間か、三秒後かというタイミングは、自由意志行使の全体のなかでそれほど大きな意味をもつものではない。行くと一旦決断したからこそ、今この瞬間か三秒後かに発動される——リベットの説によれば、無意識のうちに発動される——こともあるのであつて、その先行する決断なしに勝手に発動されることはない⁽⁵⁾。無意識の役割があるとしてもそれはごく限られたものである。つまり、リベットの实验は、自由意志というにはほど遠い限定された枠組みのなかで問うているだけである。仮にリベットの实验が経験的に正しく、しかもそれに加えてリベットが手放そうとしなかつた行動直前の「拒否権」まで否定されるとしても、自覚的な意志としての私が奪われるのは、ただ行動実行のタイミング決定の自由だけである。デネットもリベットを批判して行動方針決定と行動実行のタイミングの決定の差を指摘しているが⁽⁶⁾、たとえば実行タイミングの決定が無意識のうちになされるとしても私はまだ自由意志をほとんどそっくり保持しているといえるだろう⁽⁷⁾。

被験者が実験に参加しようと決めたことや、実験者の指示に従って手首をまげようと決めたその決定も、無意識のうちに生じていると強弁されるだろうか。もちろん実際はそうではない。最初の決定については、実験への好奇心と当日の予

定がたまたまなかったという事情などを考慮に入れて熟考して決めたのだらうし、また、後の決定については、一旦被験者となると言った以上今になって断ることはできないという配慮などが、被験者が指示に従おうとした決断を動機づけている。これらは無意識のうちに生じるような思考ではない。意識は何をなすか決定できる。直前の「拒否権」だけにとどまるものでもないのである。

先述のようにそもそも、意識が自由な意志決定の能力をあわせてもっていないなら、私にはそういう意識をもつ生存上のメリットがないことになり、意識の存在理由が謎となる。何のために自然は私に傍観しかできない意識をあたえたというのだらうか。実際はそうでなく、意識は意志決定の自由をもち行動を左右でき、生存可能性がそれによって高まったから、生存競争を勝ち抜いてこの世にあるのである。

ただしここまでの議論では、まだ意識が実現する自由な行動というものが、具体的に明らかにされていない。進化の文脈で、意識以前の生物のあり方と対比しながら、もう少し具体化してみよう。

カエルは動く小さなものを見つけるとそれに向けて舌を伸ばす。これはもちろんエサをとるための適応的な行動である。しかしこの認知が意識をとまう必要はない。入力が自動的に出力につながれば、それで何の問題もない。意識が介在してもそれ以上うまくできることもないだろう。こういうレベルのロボットなら作ることもそれほど難しくないだろうが、このロボットには入力用のビデオカメラとカメラからの情報

を処理し出力にむすびつけるコンピュータ、「舌」に代わるものとそれを動かす機構は必要だが、意識を間にはさむ必要はない。つまり、認知入力とそれにもとづく出力を実現するためだけなら、意識は不要である。意識が必要なのは、自由な行動を実現するためなのである。

カエルが意識をもつか否か確定的なことは言えないが、意識をもたないと仮定しても矛盾があるわけでないので、議論の都合上、カエルは意識をもたないと仮定して論じてみたい。カエルでは視覚入力が処理されて、小さな動くものには一義的に舌を伸ばす行動出力につながり⁽⁸⁾、視野全体が暗くなると——これが自分より大きな捕食者が来た徴しなのであらう——逃避行動に出る⁽⁹⁾。ふたつの入力情報はふたつの別々の入出力経路を組織し、一方の入力が他方の出力を生むことはない（ただしこれは、それぞれの経路が器質的に独立しているということを必ずしも意味しない。同一の神経経路がふたつの入出力経路を担うことは十分可能である）。それぞれは固定した入出力経路なのである。ここに意識が介在する必要はない。介在するメリットは、入力に対する出力を変えて、固定的入出力がときに陥る状況不適合を回避すること、あるいはさらにより適合的な出力を実現することである。つまり、先に私が現実の意識の核心をなす役割とみなした、自由な行動を実現することである。そのメリットがあるため、進化の過程のなかで意識は生まれ、生き延びてきたのである。したがって意識は、仮想的な論理においてはいざ知らず、生物においては自由な行動実現と不可分である。意識を単に

内面的なものと考えてはならない。たしかに人間意識を行動能力と切り離して考えることはできるし、単なる空想でなく実際に行動能力を失いながらも意識を保持している患者もいるという（「閉じ込め症候群」）。しかしながら、このような状態から意識を考えることは、生物の機能としての意識の本来のあり方を歪めることになる。われわれはつねに意識を自由な行動の実現という本来の機能と切り離さずに考えなければならぬ。伝統的に意識の核心的機能として理解されてきた表象機能も、あくまで自由な行動出力を可能にする入力として理解されねばならない。したがって、表象されるものは、可能的な働きかけの対象であり、あるいは私に襲いかかるなど、私へと関わってくるかもしれない対象である。そういう対象は私にとつての利害を引きおこすものであり、それに私は関心をもたざるをえない。つまり、意識にとつて表象はこのような意味づけを帯びていなければならない。たとえ私が一切の関心を欠くとき、表象は無意味である。私は表象の対象に働きかけようと思わないし、それから危険が迫ってくるという情報もたらされても、逃げようとはしないだろう。こういう意識は自由な行動を実現する生存のための機能を果たさない。こういう意識は傷病などの結果としては可能でも、意識がその機能を果たしている本来の姿ではない。

【二】「疑似ゾンビ」と人間の生存競争

前節の、意識の進化上の意義に注目する議論を適用すれば、意識を論じるときによくもちだされるゾンビ論証にも疑

いが生じてくる。哲学者が語る「ゾンビ」とは元々の語義のよみがえった死人のことでなく、人間とまったく同じ物理的組成をもち、第三者の目には意識のある人間と同じように行動しているが、実は主観的意識を欠いている仮想的存在のことである。人間の行動は、意識をもたないゾンビでも実現できそうに思える。つまり、意識だけを身体機構から取り去ったゾンビは論理的に可能なように思える。私の身体機構をもてば、必ず私のような意識が生じるということはいえそうにない。もし身体と意識の必然的なつながりが語れるなら、物理的なものが意識を必然的に生むことになるが、必然的とは思にくい。こうして、ゾンビが論理的矛盾を含まず論理的に可能な存在であるということ根拠に、意識が脳、身体など物質的なものに還元できない、独立した存在をもつものであると主張されることがある。

しかしこの見方は、意識を物質に還元できない独自のものとして確保する一方で、意識を行動と切り離して見る傾向を含んでいる。それゆえ私が前節で意識にとつて核心的なものととらえた意志としての役割が意識から切り離されてしまいかねない。このような点に注目して、本節ではD・J・チャーマーズのゾンビ論証を検討し、そのことを通じてわれわれの意識についての見方を深めてみたい。

もちろん、ゾンビが本当に論理的に可能か、そう思っているだけかは大いに疑問の余地があるだろうし、実際哲学者の間で多くの論争がある。私もゾンビの論理的可能性について納得しているわけではまったくないが、しかし本論文ではこ

の点については争わず、論理的に可能という主張をうけいれることとしよう。

本論文で私がめざすのは、生物がもつ現実の意識を中心に据えて、意識のあり方についてとらえなおすことであり、特に進化の問題がそのひとつのてがかりになる。だが、チャーマーズは、意識について考える際に生物進化の問題を考慮することはあまり意味がないと否定的にとらえる。というのも彼はゾンビを、主観的意識を欠いているほかは外見も行動も脳の細部の働きも人間と変わりなく、客観的に両者を区別できないものと定義するからである。この定義によるならゾンビと人間では生存確率も変わりなく、進化上の淘汰圧も同様であったはずだろう。チャーマーズはゾンビと人間に生存上の差がない以上、進化には意識の役割は反映されず、そのため進化に注目しても意識の解明の役に立たないと論じる(CM120160)⑩。

彼によればゾンビが論理的に可能であることが、物理法則から意識が導き出せないことの根拠である(唯物論はこうして否定される)。もし、ゾンビが論理的に不可能で、結果として人間とまったくおなじ身体をもつ存在にとつて意識が必然ということになるなら、物理法則が意識をも説明できることになるだろう。したがってゾンビの論理的可能性が物理法則と意識の決定的な懸隔を示しているという。

物理法則が意識を生むには、物理法則に還元されないもうひとつの何かが必要である。チャーマーズはその架橋を果たすのは物理法則に還元されないひとつの自然法則だという

(CM124166, CM161207)。これは論理法則でないから、この世界でたまたまなり立つ(物理法則とは別の)自然法則である。だからこそおなじ物理法則にしたがうもうひとつの宇宙では、この特別な自然法則がなり立たず、つまりこの宇宙と同じ物理法則にしたがう同じ物質(私の身体)がそろっていてもそれが意識を生みださないゾンビだということもありうるのである。一方、この宇宙では、この宇宙に妥当する特別な自然法則と物理法則により、人間と同じ身体機構を備えていれば人間と同様な意識が生じる。この宇宙にはゾンビはいない。だからこの世界で、ゾンビと人間の生存競争が生じることはない。上述のゾンビと人間の進化上の比較も、ふたつの宇宙間の比較——先述のように行動上、進化上の差異がないという結論にいたる比較——としては可能でも、この宇宙のなかでの比較としては不可能である。

この点までチャーマーズの議論を受けいれるとしよう。たしかにゾンビ宇宙のゾンビと人間宇宙の人間とを現時点で比べるだけなら進化論上の差はないかもしれない。しかしゾンビそのものでなく、ゾンビと少し違つたものを想定してみれば、その帰結の不合理さから、行動と意識を切り離すゾンビ論証そのものの問題点が明らかにできると私は考える。またそのことで進化論的考察は意識の役割の核心をとらえることができるのである。以下に見ていこう。

常識的に考えるなら、意識の実現にはそのための身体機構が必要と思われる。それは脳の一部であろう。チャーマーズは意識のために特別の身体機構は必要ないというが、まずは

彼とは逆に、一旦、この必要性を常識にもとづいて前提して考えてみたい（チャーマーズの立場をふまえた議論はその後に行う）。その上で次のような仮想をおこなってみよう。

この宇宙には意識をもった生物が多くいる。もしこのとき、意識的生物から意識を実現する身体機構だけを欠いた生物が何らかの偶然で生まれたらどうなるか想定してみよう。チャーマーズは意識なしでどんな行動も実現可能だというのが彼のこの前提については認めることにしよう。その限り、意識が欠如しても、行動はおなじでありうる。そうだとすると、行動面では同種の生物とおなじだが、意識と意識を実現する脳の部分だけ欠けている生物がいることになる。ところでこういう想定は——意識なしでも意識をもつ生物とおなじ行動が可能というチャーマーズの前提を認めるなら——それほどありえないことではない。意識を生む身体機構が遺伝的欠損により欠ければいだけだから。これと比べれば意識をもつ生物から身体的に同じままのゾンビが生まれることの方がどういうメカニズムで可能かはるかに理解しがたい仮定だとも言える。

もちろん私の想定している意識を欠いた生物は、定義上「元の意識をもつ生物の」ゾンビ」と呼べない。ゾンビは身体機構がまったく同じでなければならないが、今論じている意識欠損生物は身体機構が異なるからである。したがってこれを「擬似ゾンビ」と呼ぼう（身体（脳）部分が欠けているということだけでなく、脳の物理的活動のうち意識を生む活動だけが欠けているということでも構わない。意識のためだけの

専有部分はないかもしれないから、こちらの方がより現実的な想定かもしれない）^①。だが、その欠損生物（擬似ゾンビ）と元の意識生物では、行動はまったくおなじだから行動面での生存適合性はおなじはずである。しかしながら、あらゆる点でおなじというわけでない。「擬似ゾンビ」の方が身体機構ないし神経活動において身軽なだけ生存可能性が高い。そのため「擬似ゾンビ」が元の意識生物との生存競争に勝ち残るはずである。定義上の「ゾンビ」との生存競争ではない——先述のように、これはこの宇宙では生じない。この宇宙にはある特別の自然法則のおかげでゾンビそのものは生まれないう——が、「擬似ゾンビ」との生存競争に負け、元の意識生物は駆逐されてしまいうようなものである。しかし意識をもつものとしてこの私がいるという事実を根拠に判断すれば、実際には少なくとも人間において擬似ゾンビに席巻されてしまうことはなかったようである。また、おなじことは進化上人間の祖先にあたる生物たちにおいてもいえる。間違いなく人間以前から意識は存在しただろうが、進化の過程で人間まで意識が継承されてきた以上、人間にいたる系統の生物たちにおいて、その生物の「擬似ゾンビ」によって元の意識をもつ生物が駆逐され、人間に至る途中で意識が消滅するという事態は一度としてなかったようなのである。

どうして意識をもつ生物が駆逐されなかったのか。もし意識に頼らず意識をもつ生物と同様の行動を実現するということが、チャーマーズが想像するほど容易なことなら、前述のように意識だけを欠く欠損生物が生まれることはそれほどあ

りえないことではあるまい。駆逐はきつと生じたことだろう。だとすれば、意識が駆逐されなかったこの事実、意識に頼らず意識をもつ生物とおなじ行動を実現するということが、チャーマーズの想像している以上に困難であることを示唆している。意識は(意識をもつような高次の生物固有の、高次の)行動実現のための条件といつてよさそうである。もちろん、意識がなければこういう行動が論理的に不可能だという論証まではできたわけではまったくないけれども(冒頭に述べたように、論理的可能不可能を問うことはそもそも私の意図ではない)。

そして前節の議論をふまえるなら、意識を必要とするような高次行動の「高次」性の分水嶺となつてゐるのは、自由意志の介在だと推測できる。ゾンビの前提となつてゐる意識なしでの高次行動の実現は——そしてまた「擬似ゾンビ」も——もしかすると論理的に可能なものかもしれないが、高等な生物の現実においては非常に難しいものなのであろう。

つまり、論理的可能性のレベルではいざ知らず、少なくとも現実のこの宇宙において、意識の存在意義は自由意志の行使であり、意識は自由意志によつて行動していると強く示唆されている。それゆえわれわれは、自由意志による行動を認めないのは意識を考察する上で戦略的に得策でないといふことができる。そして意識とは上述のように、意識をもたない場合よりも生存に益しているはずのものである。生存に益するのは意識が自由意志をもつことで生物の行動をより生存にとつて好適なものに変えることができるからである。その

ため現実の意識は自由意志を不可欠の機能とする。意識なしでもわれわれと同様の活動が可能だというチャーマーズの前提は退けられる。

右に述べたのと同様のことは、人間にいたる進化の過程で意識をもつ生物が意識を失うという、私が空想した局面だけでなく、逆の、人間にいたる生物が意識を身につけてきた進化の過程においてもいえる。進化の歴史のなかで、意識ある生物はそれをもたない生物から生まれてきて、そのときに意識実現のための機構をもつようになったのは確実である。しかしもし意識の有無が行動を変えず、生存のために何のプラスにもならないなら、どうしてそういう機構の維持のための犠牲を進化が許したのか。むしろ進化は同じ行動を実現するがそういう機構を欠いた生物(「擬似ゾンビ」)を残し、意識をもつ同様の生物を淘汰するはずではなからうか。こう考えると行動実現に何の役割も果たさない意識が進化のなかで生まれてきたということは理解しがたい。意識をもつ生物が今いる以上、意識は行動にその適応のための効果が表れるような何かの働きをしているはずである。

つまり、意識はそれがあることで適応を高める行動を可能にしており、私の行動のすべてが意識のないゾンビ——チャーマーズのゾンビ——でもできるものではないはず——少なくともこの物理世界では——なのである。

さて、本節のここまでの議論は、「意識実現のために特別の脳の機構が必要だ」という常識的な前提に立つ議論である。しかしながらこの前提自体を受けいれない立場もありうる。

そもそもゾンビ論証は、人間と意識を欠くゾンビとを物理的に同じものと定義する。もし同じでも、以下のふたつの可能性がある。ひとつ目はわれわれの直前の議論のように、人間は意識のための脳機構を備え、同じ身体をもつゾンビは意識のための脳機構を無駄に備えている、という可能性である。しかしふたつ目の可能性として、意識のための特別な脳機構はもともと不要で、そういうものなしで人間は意識をもち、ゾンビは意識をもたないという可能性もある。チャーマーズは後者をとるように思われる。彼は意識が特別な仕組みも必要とせず、情報があるところ意識があると考える。「あらゆる情報は経験とむすびつく」(CM293360)「経験」とは意識されること、意識の経験である。サーモスタットもごく単純ながら情報処理を行っているので、そこに経験があるという(CM2934360)⁽¹²⁾。彼の考えでは、世界は意識であふれているといえよう。情報が意識をとまなうというこの原則こそ、先に触れた、意識を可能にする、物理原則に尽きない自然法則の骨格をなすものである(チャーマーズはそうであるという可能性を示唆するだけで、証明できたとまで主張していない)(CM286352)。

もしチャーマーズのこのような形而上学的前提を認めるなら——認めることは容易ではない。容易ではないとチャーマーズ自身も認めている(CM293360)——、意識のために特別な脳の仕組みは必要ないことになる。そうだとすれば、両者の生存上の差異は生まれず(だから先述のようにチャーマーズはゾンビも意識体も、進化上差はないということがで

きる)、したがって私が上に示したような、人間と同じ行動をする意識不在者(「擬似ゾンビ」が可能なら「擬似ゾンビ」ばかりになっていくはずだというチャーマーズ批判の論法はなり立たないことになる。

しかしながらチャーマーズの前提自体、とても軽々に受けいれられるものではない。直観的な違和感は問わないでおう。それ以外にも問題は残る。まず肝心の概念である「情報」があまりに曖昧と言わざるをえない。

「因果関係が見いだされるところすべてに情報は見いだされる」(CM293360)とチャーマーズはいう。しかし、情報は必ず因果という客観的なものにつなぎ止めることができるものだろうか。むしろ逆に、情報は、それを読み取る主体に相対的なものである。私は川の水量という情報から、上流のダムで放流があったという情報をさらに読みとることができる。しかしそれができるのは私が上流のダムがたがたび放流され、そのとき川が増水することを知っているからである。誰でも川の水量を見て放流という情報を見てとることができるわけではない。手紙に描かれた複雑な黒い線からその手紙をしたためたひとの意図という情報を読みとれるのは、手紙の文字が理解できるひとだけである。また、あるひとから手紙が来ないということは客観的にはそのひととの因果関係の不在であるが、そのことから私は相手が私に不快感をもっているとか私を軽視しているという情報を読み取ることができる。情報はこのように主観的な要素を含み、客観的因果や客観的事実から乖離することもある。だとすれば、そこに情報

があると言えるか客観的に確定できるものではなく、それゆえ意識の有無についても客観的に語れなくなる。それでいいのだろうか（情報を情報と認めるためには解釈者が必要だというわれわれの議論については、サールもこの種の反論をチャーマーズに返している⁽¹³⁾）。また、上のような事情なら、因果関係のうちに「情報」を読みとる主体の解釈に、情報が依存することになる。しかしその主体とはまさに意識ではないのか。つまり、チャーマーズは情報に意識の源泉を求めながら、その情報を情報と認める意識を、さらに情報の先に想定せざるをえなくなるといふ困難に陥る。情報は意識の源泉と認めることはできない。

ここに見たチャーマーズの議論の当否は別として、彼の議論は、意識の情報との関係を意識の唯一の存立条件とみなすことで、意識にとつて情報との関係を本質と見なしている。これは情報を受けとるものとしての役割りという、意識の認識の側面を意識の本質と見ていると考えられるであらう。しかしながら意識には、こういう認識の役割にならんで行動への意志としての役割があり、私は一節ではその重要性を指摘した。これに対し、チャーマーズは、ゾンビ論証を起点に意識と行動を切り離した——ゾンビは意識がなくてもひとと行動はおなじである——点だけでなく、今見たように情報受容を意識の本質とみなす点でもまた、意識において認識の役割を偏重し、意志としての役割を軽視しているのである。しかし、意識を生物のものとしてとらえるなら、生存に直接かわる行動とのむすびつきを無視するわけにはいかない。

ずである。意識は何より行動を導く意志のためのものである。だから情報受容が意識抜きで行動につながるような「下等」な生物——情報あるところ意識ありというチャーマーズはこういう生物を認めないかもしれないが——にならんで、意識をもつ生物がいるのも、その意識によつて生存により適した行動を選択、実現することができたためである。

認識に偏したチャーマーズの意識観も、やはり彼が現実の意識の分析を元にとりだしたものであらう。そこから彼は意識の普遍的、論理的本質へと迫ろうとしたのであらう。しかしその、彼の出发点にあった現実の意識についての理解が認識に偏っていたのである。

要するに、論理的なもの、普遍的なものへと迫ろうとするためにも、出发点であるこの現実を掘り下げることが必要であり、それを怠れば偽りの普遍を普遍と僭称するだけにとどまる。高い建物はその分深く地中まで柱を打ち込まねばならない。現実の生物の意識こそ、まず解明すべきものである。普遍的な意識のあり方を語れるかどうか、私は懐疑的であるが、普遍的な意識のあり方が語れるとしても、それはこの現実の意識を深く探求した者だけに可能であることはまちがいない。

【三】 生物の意識としての意識観——そのいくつかの帰結

ここまで、自由な行動による適応性増大が意識の役割であり、意識の誕生をうながしたものだらうという議論を展開してきた。

一節では意識を自由な行動の実現という現実の意識の核心的機能と切り離さずに考えなければならぬということが明らかにになった。意識を介さないカエルのような固定された入力・出力経路とは異なり、意識による入出力経路では、意識が入出力の間に介在し、自由な行動を実現する。これが意識の適応上の意義と考えられた。

ただ、自由な行動に意識が不可欠か、と問うならば、これについて簡単に答えることはできない。二節で検討したチャーマーズの議論に見るように、意識をもたないゾンビには不可能な種類の行動があるということを示すことはたしかに難しい。しかしながら、真の問題はゾンビ論証が偏重する「論理的な可能性」ではない。問題は現実の意識である。ただ、その現実の意識は、それが有る機能を実現するために不可欠だから生まれてきたとは限らない。特定の機能——今の場合は自由な行動実現——を可能にするのに意識という手段しかない、という事情である必要はないのである。ほかの手段で可能でも、意識という手段の方が効率的なら意識という手段に頼る十分な理由になる。もちろん、意識をもてば効率的だとしても、意識を進化によって生み出すことの難しさは、意識をもつために乗りこえるべき壁として立ちはだかるから、効率的だというだけで意識をもつことができるわけではないのは当然だけれども。しかし少なくとも特定の機能にとつて意識が不可欠であることは意識が生まれるための必要条件ではない。

だからこそわれわれは、論理的な考察——意識を不可欠と

する条件の考察など——でなく、現実の意識の進化に即して意識を考察する必要がある。「自由な行動」といえば、本能にとらわれない理性的、創造的な行動を思い浮かべがちだが、それは人間的なレベルのものであり、私が焦点を当てているのはそのレベルではない。意識の誕生にかかわるような、進化のもっと古い層で、「自由な行動」はどういうものであつたらうか。思弁的に「自由な行動」の条件をしばらく思索を展開するのは、ゾンビ論証が陥っていたような觀念の遊戯になリかねない。それを避けるために、「自由な行動」の具体的なありかたを具体的な場面——ある種の学習の場面——を例にとつて事実 に即して考えていきたい(14)。

以下、本節では具体的事象にできるかぎり即すという姿勢を維持しよう心がけながら、意識が自由な行動のためのものであるということの帰結をいくつか確認してみたい。

私は、一節で見たリベットの意識観の再検討によって、自由な行動の実現にかかわる意識の具体的なあり方、とりわけその意識進化の最初期段階を探ることにしたい。意識進化の最初期段階がいくらでも明らかになれば、意識がそのために存在するようになった、意識の核となる機能が何かについての重要なてがかりをあたえてくれるはずであり、意識とは何であるかということの理解にとつて、大きな示唆をあたえてくれるだろう。リベットを批判するデネットも進化的論的観点に注目して意識を考察するものの、意識の誕生に関してこのような論点を展開することはない。それは一節の注7で述べたように、デネットが意識の特権性を剥奪し、意識と非

意識の境界が明確には引けないことを主張し、そのため両者の決定的な境界にかかわる「誕生」の場面が背景に押しやられてしまったことが一因であろう。

一節で触れたリベットは学習と意識との関係を論じている。

先述のようにリベットの説では、刺激があっても、その刺激が〇・五秒程度以上持続する脳の反応を惹起しない限り、その刺激の意識化はおこらない (MT46-50/53-58)。しかしながら、それ以下しか持続しない場合でも、その刺激について条件づけが可能になることがあるという (MT92-93/108)。そこで参照されているクラークらの論文⁽¹⁵⁾によれば、「遅延条件づけ」(delay conditioning)——条件刺激に遅れてその継続中に、無条件刺激が生じし、両者の終わるのは同時の条件づけ——においては、無意識でも学習が可能である。学習にとつて記憶は不可欠であろうが、この種の学習は、海馬という記憶の座——ただしこの記憶は文脈的・命題的な記憶であつて、身体技能などの非命題的記憶にかかわるのは海馬とは別のところである——を損傷した者でも可能である。しかしながら、おなじ条件づけでも、「痕跡条件づけ」(trace conditioning)——条件刺激が無条件刺激に先行し、両者間に時間的空隙がある条件づけ——では事情が異なる。被験者が刺激を意識することが条件づけの条件であり⁽¹⁶⁾、また海馬損傷者では不可能である⁽¹⁷⁾。

痕跡条件づけには意識化と海馬の両方が必要だが、このふたつはひとつではないか。つまり、海馬(が蓄える文脈的知

識)は意識を可能にする条件であるので、海馬損傷が意識を不可能にし、その結果意識を必要とする痕跡条件づけは不可能になるのではないか、という解釈が可能性として浮かんてくる。意識の成立に〇・五秒の持続が必要だということは、〇・五秒前の過去を意識に対して保持する記憶の介入を示唆しているようにも思える。しかし、海馬損傷患者も意識をもちうるから、海馬損傷ゆえ意識が生じないわけではない (MT63/73-74)。要するに、海馬損傷による記憶障害と、意識化できないことは別々な仕方て学習を不可能にしている。海馬損傷患者に「痕跡条件づけ」だけ不可能なのは、「遅延条件づけ」が、両刺激の単なる連合を学習するだけであり、非文脈的知識の範囲に収まるのに対し、両刺激が時間的空隙をはさむ「痕跡条件づけ」では、両者の先後関係を意識的に理解する、文脈的知識の範囲に踏み込むことになり、意識が必要だからである。また学習のためそういう文脈的知識を記憶する段階において、そういう知識を記憶する役目をもつ海馬が必要となるのだという⁽¹⁸⁾。

海馬が文脈記憶に必要だということは今までの研究で実証されているので受けいれてよからう。しかしながら私が問題にしたいのは、もうひとつの点、つまりなぜ文脈的にふたつの事実を関係づけて見る能力が、意識を必要としているのかという点である。この点には、リベットもクラークらも答えてくれない。しかしこのことは文脈的関連づけが意識の核心的働きに関連していることを示唆しているように思われる。考えてみよう。

痕跡条件づけで学ばれる、時間を隔てたふたつのことがらについては、関連を見てとる働きがないと結びつけられない。記憶以前に、その関連づけの働きが必要であり、海馬はそういう働きで生みだされた文脈的記憶を蓄積する形で痕跡条件付けにかかわるだけであろう。「関連を見てとる働き」は、意識の働きなのか。時間を隔てたふたつのことがら先行事象Aと後続事象Bは、一義的な仕方では結びつかない。Bとむすびつく候補は無数にあり、そのなかからAを特権視しBとむすびつける候補とみなす基準が必要になる。しかし基準は無数に可能であり、むすびつきも無数に可能である。もちろん、試行錯誤でひとつにしぼることは可能だが、そのためにも無数の候補をあらかじめいくつかにしぼりこむ必要がある。どれを残すかは恣意的ではないが、その恣意をもちこむ主体の働きが必要である。どれを残すかは主体の自由である。機械的な働きでは不十分である。こうして、時間を隔てたふたつの事態の関連づけという意識の機能の確認は、意識の存在意義を自由な行動の可能性に見る、先の議論を裏づけることとなる。

自由な行動のための意志が意識の核心をなすなら、行動とそれによって達成される目的とを自覚し、意図的に行動を行うことが意識の核心的な役割ということになる。つまり文脈的にことがらをむすびつけてとらえることこそが、行動と目的とを原因と結果の関係でとらえるための条件をなす。学習は目的的行動の実行を通して生存可能性を高めるために不可欠である。

このように考え直すと、リベットで問題とされたふたつの項を関係づける自由な意識の働きは、たんなる恣意的な自由ととらえるべきではないとわかる。生物の実際の生活のなかで、それは自己の生を維持し適応度を高めるための働きとして現実化されている。生存のために行動する生物が、自由な行動を方向づける「目的」・「因果」などの諸々の意味をこの世にもたらし、こうして世界に意味が生まれてくるのである。

こうして、痕跡条件づけにおいて意識が介在するのは、まさに意識が自由な行動の実現にかかわるものなら当然のことだと理解できる。二つの事態の自由な結びつけにより、固定的な入出力の結びつきをこえた行動の自由が実現されるが、これもすべて意識の核心的機能の一環なのである。

それでは、意識的学習に対立する無意識的学習はどういうものと理解すべきだろうか。「遅延条件づけ」——条件刺激に遅れて無条件刺激が始まるが、同時に終わる——の学習については、〇・五秒の識域に達しないため意識化されていない状態でも学習できるのだった。

こういう遅延条件づけだと、ふたつの刺激は同時に生起している時間があるので、関係づけが機械的に生じることも十分可能だろう。そこに何か主体の働きや、ましてや意味づけは必要ない。コンピュータに意識があるわけではない。だとすれば、遅延条件づけで刺激が意識化されないまま条件づけが生じるとしても、不思議ではない。われわれの先の議論で

は、意識化が必要なのは自由な行動への意志にかかわるときであるので、自由意志の働くまでもないここでは、意識化されないまま済んでも不思議ではないといえよう。

あるいは「ここでも、同時的な事態に限っても、当該のふたつの事態以外に無数の事態があるから、選択は不可避ではないか。つまり、ここでも刺激の意識化が必要ということになってしまふのではないか」と反論されるだろうか。しかし意識以前の注意もあるという⁽⁹⁾から、遅延条件づけでは意識以前の注意が、何か機械的な原則にしたがってピクアツプしたただ一つの対象とむすびつけるかたちで、刺激が意識化されないまままで学習は可能とみられる。一方、時間差のある「痕跡条件づけ」では、記憶された過去の注意対象に頼ろうとしても、そういうものは数多くあり、どうしても選択が必要になってしまふ。自動的な選択で対処するには、——程度問題であるが——はるかに難しくなる。

たしかに、遅延条件づけだけでなく、痕跡条件づけも、コンピュータで実現できないだろう。コンピュータに恣意的な仕方でもすびつけさせることはできないにせよ、こういう項を優先するかという結合の原則を予め組みこんでおけば可能と思われる。また、実験室のような単純化された状況では、先行刺激とむすびつけ可能な刺激をただひとつに限定することも容易である。したがって、論理的には痕跡条件づけに自由意志を介在させる必然性はなく、自由意志が不可欠とは言えないのかもしれない。しかし何度も言っているように、問題は論理的に不可欠かどうかではなく、実際の生物が

どうなのかであり、実際の生物では痕跡条件づけには意識がかかわり、自由な条件づけ関係を実現しているのである。論理的に不可欠といえなくとも、そうすることに進化上一定度の利点があれば、意識が介在することは十分ありうるのである。

ここまで、自由な行動実現を意識の核心的機能とみなして、学習の事例にしぼって意識のあり方を見直そうとしてきた。ただ、注意すべきはこのような意識はそれだけでなりたつ孤立したものでなく、そういうものとしてとらえると誤解を生むということである。それは前述のように、意識は生物の適応した生存の機能の一環として生まれてきたものであり、自由な行動実現も適応のための生物全体の活動の一部として考えなければならぬからである。

というのも、意識が実現する行動の自由は、それだけでは適応性を向上させるには不十分だからである。たとえば前に見たカエルのような固定した入出力に、意識による行動選択の自由が加わったとしよう。しかしこれだけでは適応性は向上しない。出力の選択肢が多様化しただけであたえられる入力が同じなら、意識は恣意の自由をえたに過ぎない。網膜からの情報が無意識のうちに処理されて、食物を示唆する小さな動物が目に見えたという情報が入力としてどき、カエルはそれを食べようとして舌を伸ばす。このとき入力はそのままでしよう。出力側の選択肢としては舌を伸ばす以外にその情報を無視する、接近物から逃げる、というような複数の選択肢があっても、入力情報がこれだけしかないなら、舌を伸ば

す選択肢以外は合理的適応的ではない。一方、もし、入力をもっと詳細で、たとえばその対象が有害な対象だと判断できる情報が得られるなら、無視の選択肢も適応的かもしれない。しかし、現在の入力条件では、無視を選ぶことは多く不適切である。つまり、入力が固定されていると、意識の実現する行動選択の自由も恣意の自由にとどまり、無用の長物でしかない。より適応的な行動を実現するためには、意識が適切な出力を選択する手がかりをえるために利用できる入力源が必要になる。固定的な入力とはそれ以外の方法で利用しようがないから、その入力とは別の入力があつて、出力選択に利用できねばならない。

つまり、自由な意識は、入力情報の多様性を求める。すでに処理され、固定された意味をもった入力でなく、意識が処理できる入力、つまり意識が（一義的でない）多様な意味をあたえることができる入力が必要である。適応的な役割を果たすために、入力は多様であらねばならず、意識はそれを総合し合理的な行動につなげるものである。

適応度を高めるためには、意識の総合性は、より多くの入力をもつことが望ましい。視覚だけでなくほかの感覚、また記憶内容、身体内感、それらがすべて一同に意識が行動選択のために利用可能なものとしてあたえられるなら、それを総合して下される判断は、より以上に現在の状況に適合的なものになるだろう。こうして意識はより広い総合に向かう（ただ、意識の情報処理能力に限度がある以上、無制限に何でも意識にあげればよいということにはならない。無意識の処理

を残すことにも合理性がある。無意識が事前処理をして意識に対する関門となることなども、そういう合理的な対処のひとつである）。

二節で触れたハンフリー『ソウル・ダスト』も、意識は生存適性をもつはずだというわれわれとおなじ議論を展開している²⁰⁾。ただ、それはわれわれが注目した自由な行動実現のためというより、意識が世界への関心をもたせること、快を求めさせるというもっぱら動機づけの面に注目し、意識は世界への積極的な関わりをうながし生存適性を増すのだという²¹⁾。彼の考えに対してわれわれは、関心や動機づけは自由な行動実現を左右するという点で生存適性を増すのであり、自由な行動を実現する可能性が関心や動機づけに前提されると指摘できるであろう。生存適性を増すための意識の機能としては、自由な行動実現能力の方が根本的である。ただ、ハンフリーの議論にも真理は含まれている。つまり、先に見たように、自由な行動によつて生存適性を高めるためには、意識は恣意の自由をもつだけでなく、その支えとなるさまざまな条件を備えていなければならない。その一つが先に触れた入力情報の多様性であるが、関心や動機も同様の役割を果たしうる。それらが生存のためふさわしく喚起され、自由な行動がその適切な充足をもたらすべく利用されるとき、生存適性を高めるのである。

その動機づけをあたえるものの一つが感情である。これにしばつて少し見てみよう。

行動は目的をもつものであるが、入力を活用して、現在の

環境にできるかぎりふさわしい行動目的をもつことが望まれる。自由な行動の可能性をもつていても、状況に適した目的をもたないと、行動が適応のために役立つことはない。目前の対象に食欲を抱くとき、それへむかつて近づくという行動選択肢も合理的なものになる。合理的目的をあたえるものがないければ、自由な行動ができて宝の持ち腐れであったり、かえって不利益な行動に走ったりしかねない。生きるためにふさわしい目的を意識に對しあたえることが必要であり、その役割を担うものの代表が感情である。感情は対象や行為のもつ生にとつての意味を意識に明らかにする。感情のようなものが意識に現れるまでは、生物は行為しても、その行為の意味やその働きかけの対象の意味はその生物自体には明らかではなかっただろう（痛みなど感情以外のものが感情以前に生まれ、対象の意味をあたえていた可能性はあるが）。そのときまで生物は遺伝的に決められたように固定的な反応を返していただけだったのである。

仮に対象に意味をあたえる感情以前に意識があったとしても、そういう状態の意識に対象が知覚されて現れていたとしても、それに感情が生物にとつての意味をあたえることがないため、そのものが何の意味をもつか生物は「理解」していることにならない。この「理解」がないなら、意識は情報を使いこなして生にとつて適切な行動を選べないだろう。というのも、「理性」をもつ人間やそれに近い高次の生物は別として、環境や対象がもつ生物自身にとつての意味、価値は感情などがあたえるものだからである。

だとすれば、先に、「意識が自由な行動を実現するだけ、では適応度が高まらないのであって、利用できる情報が増さねばならない」と述べたのと同様のことがここでも言える。つまり、自由な行動実現だけでなく、感情的な意味づけが同時になされなければ適応度の増大は見込めないのである。またもちろん、本節で触れた学習にもこのことはあてはまる。学習によつて経験から学ばねば、自由な行動も利益につながらない（ただし、感情の場合と異なり、学習できなければ自由な行動が適応的でありえないということではない）。

このように、意識はそれを支える別の各種の機能が一緒にあって、それで行く生に適応性を高めるために貢献できているのである。その諸機能は、私を取りあげただけに尽きないだろう。だから意識だけを切り離して論じても、それは抽象であり、現実の意識の核心的機能やその進化を論じる上であまり成算はない。

しかしながら、このように考えてくると、進化の歴史のなかで、意識はそれを有用にするための一団の複雑な諸機能と同時に、一度にパッケージとして誕生したということになりそうである。たしかに上に見たような、固定されない入力、学習機能、感情等すべてを欠くことができないというのではない。私は意識の「本質」を探つてこれらの機能に行きついたのではないからである（私は哲学者の常套手段であるこういう「本質」探求は意図的に回避してきた）。しかしながら適応性をもつ合理的選択が可能するためには、上述のいくつかの最低限のパッケージは意識と同時に必要であろう。だとすれば、意

識誕生時に、一義的に固定されない多様な入力と感情ぐらいは、意識が利用できる最低限の手がかりとして必要と思われる。しかしながらこれだけに限定しても、意識と同時にこのようないくつかの主要能力が一举に生まれたというのは、進化したかなりありそうにない事態のように思われる。どう考えるべきだろうか。あくまで憶測に過ぎないが、次のように考えればこの問題の困難さは一定度緩和されるのではないだろうか。

意識とそれを経る入出力経路、および意識に適応価値をあたえる付属機能は、無から一挙にできたのではなく、既存の無意識の固定した入出力経路と付属機能とにつけ加わるバイパスのような形で生まれ、その既存の経路、付属機能と並行して機能するようになったというのがその考えである。詳しく見てみよう。

まず知覚についてである。無意識のうちで処理され、固定された出力につながる経路が、意識に先行している。この経路を走る知覚情報を、固定された出力につながる以前の、まだ処理途中の段階——途中なだけに外界の多様な情報がそのままあたえられている——でバイパスによって意識に届けられ、上述のような自由な適応的行動のための情報を得る入力の豊富化という要請は実現できる。

感情についていえば、こちらも意識以前に、意識されない感情的な——意識にのほらないので普通の意味では「感情」と言えないが——身体操作は可能だったと思われる。意識をもつ人間において、たとえば怒りは興奮を高めるが、アドレ

ナリンの放出といった化学的過程がこれを媒介しており、この過程は怒りの意識的な過程とは別の過程である。こういった無意識の過程が意識の誕生以前からあって、身体をコントロールしていたということは十分考えられる。それは意識されないから「感情」とは呼べないが、無意識でも当然、適応上の役割を果たしたであろう。敵が襲ってきたというような怒りの（先行的な無意識）「感情」が生じるような状況で、アドレナリンの効果による活動性の高まりは、生存に適合的である。

この先行的な無意識の「感情」が、進化したあとから生まれてきた意識によってモニターされて、怒りなら怒り特有の意識内容を引きおこし、それが自由な行動創出のために利用される。今までの固定的入出力経路による決定論的な行動決定は残っているものの、意識は独自の判断でその決定に介入する。こういう事情である。こういうバイパス的付加だと、意識とそれに関わる新機能がおきかえの形で生まれる場合より大きな利点がある。というのも、もしおきかえが生じるなら新機能を担う組織が完成するまでの中間状態では生きていけないから、最初から一挙にその組織ができあがっていないければならないことになる。これとは対照的に、私の想定するバイパスなら、ひきつづき古い機能を利用し生きていくことができる。最初は自由な行動を可能にする最低限の意識とそれへの入出力バイパスができただけであろう。その後、ひとつずつ新しい機能がつけ加わっていったのであろう。

このような理解にはもうひとつ利点がある。われわれ人間

において意識による入出力経路だけでなく、無意識の入出力経路が残され働いているが、その実情になつていふ点である。無意識の経路がまずあって、意識がバイパス的にそれに加わつたということは、この実情に照らし、理解しやすい。

【おわりに】

われわれは意識がそなえるべき条件を明らかにしようとしてきた。意識について考えるとき、もつとも根本にあるのはチャーマーズの言ういわゆる「ハード・プロブレム」、つまり物質から意識がどうして生じるのかという問題であり、私ももちろんそれに大きな関心を抱いている。しかしそれについては経験科学の解明を待たねばならない部分も多く、容易に語れるものではない。ただ、この根本問題に迫る上で、意識の備えるべき条件を明確化することが一助となるのは明らかであろう。

そういう意図で本論文では意識の原初的形態と想定されるものに焦点を合わせ、そのような意識の核心的性格を学習などの具体的な場面に即して明らかにしようとしてきた。一、二節で、自由な行動実現こそ意識の核心的機能であると判明した。三節では、その自由な行動は適応性を高めるものでなければならぬ以上、意識は「裸」であつてはならず、意識への入力、そこからの出力に関し、さまざまな機能に支えられていなければならないということを明らかにした。また、同様に自由な行動が適応のために有用となる条件を考えてい

くと、通常意識に帰せられるほかの核心的条件である総合性なども、意識が当然備えていなければならないということが判明した。意識が総合性をもつのは偶然ではないのである。また、このような理論の帰結と現実の一致は、本論文で主張してきた、自由な行動を可能にする条件としての意識観の妥当性を示している。

現実の意識に定位するなら、生物の意識という観点から意識を考えざるをえない。すると意識が生と不可分に関わっているということに目を向けざるをえない。その結果、意識を考える際に、意識をもつて世界を生きぬくための最低限の諸機能と切りはなすわけにいかないということが判明する。「意識だけ」を切りはなして考えようとするゾンビ論証のような道は、こういう意識のありかたを歪めてしまうことは明らかである。この道は少なくとも戦略的に見込みのないものである。また、三節最後では、このような意識の適応性を実現するための一団の機能がすべて必要だということは、進化した信じられないような奇跡を必要とするのではないかという疑問に対し、一定の答えを提案した。

たしかに本論文で見たのは意識の核心的機能とみなされるもののごく一部である。また、とりわけ本論文は意識と言える最低段階のものに焦点を合わせてきたため、一般に理解される典型的な「意識」のイメージとは食い違う面もあろう。たとえば行動の自由は意識の核心だと論じてきたが、この自由は人間などの高次意識の自由とはずいぶん異なっている。高次意識の自由は複数の選択肢を明瞭に意識したなかでの選

択であろうが、われわれが焦点を当ててきた自由はそういうものではなく、ひとの自由意志と同じ意味で「自由意志」というにはいささかのためらいを感じるような意志のあり方であらう。

しかしながら、意識について説明しようとするなら、まずはこういう意識の最下層から出発し、自由な行動との関連で意識を見なおさねばならない。反省的で命題的な思考、言語を展開する意識は、この枠から外れてしまう面をもつだろうが、人間の意識という高次意識から意識を考えるのは戦略的に拙劣である。人間という限られた種のごく限られた意識の領域を覆うだけの意識観から、それを一般化する形で意識を考えるのが困難なことは明らかである。

注

- (1) B. Libet, *Mind Time: The Temporal Factor in Consciousness*, Harvard U. P., 2004. (邦訳『マインド・タイム』二〇〇五年)
- (2) 刺激自体が〇・五秒持続せねばならないわけではない。刺激を受けて生じる脳活性化の持続時間であり (op. cit., pp. 46-50, 邦訳五三―五八頁)、この活性化は脳において直接計測される。
- (3) MTは前掲書『マインド・タイム』(Mind Time)の略号。この著作からの引用ないし参照の場合は、MTとともにページを本文中にカッコに入れて示す。スラッシュの前が原著、あとが邦訳の頁。
- (4) なお、このような調整は何も意識の時間的同期のためだけに特別になされているものではない。リベットはこれ

を、脳の特定の体感覚の感知にかかわる部分を直接刺激すれば、それが体表空間の感覚として調整されるというような、空間的な調整と同列のものとしてとらえている (MT81-82, 94-95)。

- (5) 先述の自動車のブレーキをかける場合はどうか。これは少年を見て、その後にブレーキを踏む決断がなされるのであり、先の実験と異なり通常の自由意志行使の枠組みがそろっている。しかもここではブレーキを踏む無意識の「決断」が飛び出しの意識化以前に生じ、実行のタイミングも意識化以前である。しかしながらこの例 (MT90-91, 105-107) は、明言はされていないものの、実験例でなく説明のための仮想例に過ぎないようである。したがってこの例で、無意識の決断が意識に先行していると実証されているわけではなく、私の議論への反証と受けとる必要はない。

- (6) デネット『自由は進化す?』(Freedom Evolves, Penguin, 2003, pp. 238-239, 邦訳三三三頁。)
- (7) デネットはリベット批判にかぎらず、進化論的な観点から意識を詳しく論じている。しかし、たとえば「自由は進化する」、『解明される意識』(Consciousness Explained, Penguin, 1993, 特に7章「意識の進化」)において意識の進化論的考察を展開しているものの、意識の進化上の誕生の局面を論じるのでなく、意識の進化上の誕生のち、とりわけ人間的意識におけるその進化を問うことに主眼がある。これは彼が意識をいわゆる「百鬼夜行型」の分散構造としてとらえようとするために、意識と非意識の差異を曖昧にすることに力点が置かれたことによるであらう。意識の誕生というところえ方は逆にその差異を際立たせることになり

かねないと恐れたのであろう)

- (8) J. Y. Letvin et al., *What the Frog's Eye Tells the Frog's Brain*, in *Proceeding of the Institute of Radio Engineers*, 49, 1959, p. 1951.

- (9) 塩入論「視覚処理のインテリジェンス」日本印刷学会誌四二巻一号、二〇〇五年、三頁。

- (10) C M は D. J. Chalmers, *The Conscious Mind*, Oxford U. P., 1996. の略号。この著作からの引用ないし参照の場合は、C M とともにページを本文中にカッコに入れて示す。スラッシュの前が原著、あとが邦訳「意識する心」の頁。

- (11) N・ハンフリーは私の擬似ゾンビとよく似た、意識のための身体機構を欠く生物を想定し「心理学的ゾンビ」(*Soul Dust*, Princeton U. p., 2011, p. 70. 邦訳『ソウル・ダスト』九一頁)と呼んでいる。同書ではこれと人間との生存競争という私が以下述べているのとおなじ発想も見られるものの、意識の有無で行動面に差が生じ、ということを確認する (*op. cit.*, pp. 72-72. 邦訳九三〜九四頁) 点々。——われわれと異なり——ゾンビ論証の大前提を最初から認めていないし、彼では逆に「心理学的ゾンビ」が生存競争に敗れてしまう。

- (12) サーマスタットの意識については、マカーシーが早くに語っていると云う (J. R. Searle, *Minds, Brains, and Science*, Harvard U. P., 1984, p. 30. 邦訳『心・脳・科学』三二頁)。

- (13) Searle, *The Mystery of Consciousness*, 1997, p. 176, pp. 205-206. (邦訳『意識の神秘』二四一頁、二一一頁。)

- (14) 自由以外にも感情は重要である。感情は少なくとも哺乳類全体には共有されるもの (J. Panksepp & L. Biven, *The Archaeology of Mind*, Norton & Company, 2012, p. 32.) “たゞ

れる。感情は人間においては意識されるものだが、人間だけでなく、おそらくかなり進化の初期段階から意識されるもの、つまり意識を通じて行動に影響をあたえるものであったはずである。感情と自由な行動を媒介することが初期の意識の大きな役割だった可能性はあるし、もしかするとそのために意識が生まれた可能性もあるかもしれない。ただ、本論文では以下にくくわずかし感情について論究できない。

- (15) R. E. Clark & L. R. Squire, *Classical Conditioning and Brain Systems: The Role of Awareness*, in *Science* 280, 1998, pp. 77-81.

- (16) *Op. cit.*, p. 78.

- (17) *Op. cit.*, p. 77.

- (18) *Op. cit.*, p. 80.

- (19) A. Damasio, *The Feeling of What Happens*, p. 18. (邦訳『無意識の脳「自己意識の脳」』三八頁)

- (20) *Soul Dust*, pp. 14-15. (邦訳二八頁) *Op. cit.*, p. 71. (邦訳九二頁)

- (21) *Op. cit.*, pp. 88-89. (邦訳一二二〜一二四頁)